

1

解答解説のページへ

袋に白球と黒球が 5 個ずつ入っている。以下のゲームを n 回続けて行う。

袋から 1 個の球を取り出す。それが白球ならば 1 点獲得する。黒球ならばさいころを投げ、出た目が 3 の倍数ならば 1 点獲得し、そうでなければ得点しない。袋から取り出した球は戻さない。

- (1) $n = 2$ の場合、総得点が 2 点となる確率を求めよ。
- (2) $n = 4$ の場合、総得点が 2 点以上となる確率を求めよ。
- (3) $n = 10$ の場合、総得点が 8 点以上となる確率を求めよ。

2

解答解説のページへ

- 座標平面上に曲線 $C: y = \frac{1}{x}$ および 3 点 $A(-1, -1)$, $B(-1, 0)$, $D(1, 0)$ がある。
- 曲線 C 上の点 $P\left(t, \frac{1}{t}\right)$ に対して、直線 AP と直線 $y = -2$ の交点を Q とする。ただし、 P が A と等しいとき、直線 AP とは A における C の接線のこととする。また、直線 BQ に点 D から下ろした垂線と直線 BQ の交点を R とする。
- (1) 点 P が曲線 C 上を動くとき、点 R の軌跡を求めよ。
 - (2) 直線 PR が原点を通るような実数 t の個数を求めよ。

3

解答解説のページへ

以下の問いに答えよ。

- (1) $w = \cos \frac{2\pi}{5} + i \sin \frac{2\pi}{5}$ とする。ただし、 i は虚数単位である。 z を 0 でない複素数

とするとき、次の等式を証明せよ。

$$\left(z - \frac{1}{z}\right) \left(wz - \frac{1}{wz}\right) \left(w^2z - \frac{1}{w^2z}\right) \left(w^3z - \frac{1}{w^3z}\right) \left(w^4z - \frac{1}{w^4z}\right) = z^5 - \frac{1}{z^5}$$

- (2) ある定数 C に対して、等式

$$\sin \theta \sin \left(\theta + \frac{2\pi}{5}\right) \sin \left(\theta + \frac{4\pi}{5}\right) \sin \left(\theta + \frac{6\pi}{5}\right) \sin \left(\theta + \frac{8\pi}{5}\right) = C \sin 5\theta$$

がすべての実数 θ で成り立つことを示せ。また、 C の値を求めよ。

- (3) $\sin \frac{\pi}{10} \sin \frac{3\pi}{10}$ の値を求めよ。

4

解答解説のページへ

2 曲線 $C_1 : y = e^{ax}$, $C_2 : y = a \log x + b$ は, x 座標が t ($0 < t < 1$) の点で接していて, $a \neq 0$ であるとする。ただし, 2 曲線が点 P で接するとは, P を共有し, P における接線が一致することである。

- (1) a および b を t の式で表せ。
- (2) 曲線 C_1 と x 軸, y 軸および直線 $x = t$ で囲まれた部分の面積を $S_1(t)$ とする。極限值 $\lim_{t \rightarrow 1-0} S_1(t)$ を求めよ。
- (3) 曲線 C_2 と x 軸および直線 $x = t$ で囲まれた部分の面積を $S_2(t)$ とする。極限值 $\lim_{t \rightarrow 1-0} S_2(t)$ を求めよ。

5

解答解説のページへ

多項式 $f_n(x)$, $g_n(x)$ ($n=1, 2, 3, \dots$) を条件 $f_1(x)=x$, $g_1(x)=1$,

$$f_{n+1}(x) = f_n(x) + xg_n(x), \quad g_{n+1}(x) = g_n(x) - xf_n(x)$$

で定める。

(1) 正の整数 n に対して, 等式

$$\{f_{n+1}(x)\}' = (n+1)g_n(x), \quad \{g_{n+1}(x)\}' = -(n+1)f_n(x)$$

が成り立つことを示し, 多項式 $f_n(x)$ の次数を求めよ。

(2) 正の整数 n に対して, 区間 $-\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{\pi}{2}$ において等式

$$\sin n\theta = f_n(\tan \theta) \cos^n \theta, \quad \cos n\theta = g_n(\tan \theta) \cos^n \theta$$

が成り立つことを示せ。

(3) 正の整数 n と実数 a に対して, 方程式 $f_n(x) = ag_n(x)$ の異なる実数解の個数を求めよ。

1

問題のページへ

- (1) 題意のゲームを行ったとき、白球で 1 点獲得するのを「白 1」、黒球で 1 点獲得するのを「黒 1」、黒球で点を獲得しないのを「黒 0」と表す。

さて、2 回ゲームを行い、総得点が 2 点となる確率は、

$$(i) \text{ 白 1} \rightarrow \text{白 1} \text{ のとき } \frac{5}{10} \times \frac{4}{9} = \frac{2}{9}$$

$$(ii) \text{ 白 1} \rightarrow \text{黒 1} \text{ のとき } \frac{5}{10} \times \left(\frac{5}{9} \times \frac{1}{3} \right) = \frac{5}{54}$$

$$(iii) \text{ 黒 1} \rightarrow \text{白 1} \text{ のとき } \left(\frac{5}{10} \times \frac{1}{3} \right) \times \frac{5}{9} = \frac{5}{54}$$

$$(iv) \text{ 黒 1} \rightarrow \text{黒 1} \text{ のとき } \left(\frac{5}{10} \times \frac{1}{3} \right) \times \left(\frac{4}{9} \times \frac{1}{3} \right) = \frac{2}{81}$$

$$(i) \sim (iv) \text{ より、求める確率は、} \frac{2}{9} + \frac{5}{54} \times 2 + \frac{2}{81} = \frac{35}{81} \text{ となる。}$$

- (2) (i) 4 回ゲームを行い、総得点が 0 点となるとき

黒 0 → 黒 0 → 黒 0 → 黒 0 の場合より、その確率は、

$$\left(\frac{5}{10} \times \frac{2}{3} \right) \times \left(\frac{4}{9} \times \frac{2}{3} \right) \times \left(\frac{3}{8} \times \frac{2}{3} \right) \times \left(\frac{2}{7} \times \frac{2}{3} \right) = \frac{8}{7 \times 3^5}$$

- (ii) 4 回ゲームを行い、総得点が 1 点となるとき

- (ii-i) 白 1 が 1 回、黒 0 が 3 回のとき

白 1 → 黒 0 → 黒 0 → 黒 0, 黒 0 → 白 1 → 黒 0 → 黒 0, 黒 0 → 黒 0 → 白 1 → 黒 0, 黒 0 → 黒 0 → 黒 0 → 白 1 の場合より、その確率は、

$$\frac{5}{10} \times \left(\frac{5}{9} \times \frac{2}{3} \right) \times \left(\frac{4}{8} \times \frac{2}{3} \right) \times \left(\frac{3}{7} \times \frac{2}{3} \right) \times 4 = \frac{40}{7 \times 3^4}$$

- (ii-ii) 黒 1 が 1 回、黒 0 が 3 回のとき

黒 1 → 黒 0 → 黒 0 → 黒 0, 黒 0 → 黒 1 → 黒 0 → 黒 0, 黒 0 → 黒 0 → 黒 1 → 黒 0, 黒 0 → 黒 0 → 黒 0 → 黒 1 の場合より、その確率は、

$$\left(\frac{5}{10} \times \frac{1}{3} \right) \times \left(\frac{4}{9} \times \frac{2}{3} \right) \times \left(\frac{3}{8} \times \frac{2}{3} \right) \times \left(\frac{2}{7} \times \frac{2}{3} \right) \times 4 = \frac{16}{7 \times 3^5}$$

$$(i)(ii) \text{ より、総得点が 1 点以下の確率は、} \frac{8}{7 \times 3^5} + \frac{40}{7 \times 3^4} + \frac{16}{7 \times 3^5} = \frac{144}{7 \times 3^5} = \frac{16}{189}$$

以上より、4 回ゲームを行い、総得点が 2 点以上となる確率は、

$$1 - \frac{16}{189} = \frac{173}{189}$$

- (3) (i) 10 回ゲームを行い、総得点が 8 点となるとき

白 1 が 5 回、黒 1 が 3 回、黒 0 が 2 回より、その確率は、

$$\frac{5!}{10P_5} \cdot \frac{5!}{5P_3} \left(\frac{1}{3} \right)^3 \left(\frac{2}{3} \right)^2 \times \frac{10!}{5!3!2!} = \frac{40}{3^5}$$

- (ii) 10 回ゲームを行い、総得点が 9 点となるとき

白 1 が 5 回、黒 1 が 4 回、黒 0 が 1 回より、その確率は、

$$\frac{5!}{10P_5} \cdot \frac{5!}{5P_5} \left(\frac{1}{3}\right)^4 \left(\frac{2}{3}\right) \times \frac{10!}{5!4!1!} = \frac{10}{3^5}$$

(iii) 10回ゲームを行い、総得点が10点となるとき

白1が5回、黒1が5回より、その確率は、

$$\frac{5!}{10P_5} \cdot \frac{5!}{5P_5} \left(\frac{1}{3}\right)^5 \times \frac{10!}{5!5!} = \frac{1}{3^5}$$

(i)～(iii)より、10回ゲームを行い、総得点が8点以上となる確率は、

$$\frac{40}{3^5} + \frac{10}{3^5} + \frac{1}{3^5} = \frac{17}{81}$$

[解説]

基本的な確率の問題で、最も要求されるのは注意力です。なお、(2)(3)の解答例については、場合分けをまとめて記しています。

2

問題のページへ

(1) 3 点 $A(-1, -1)$, $B(-1, 0)$, $D(1, 0)$, および曲線

$C: y = \frac{1}{x}$ ……①上の点 $P(t, \frac{1}{t})$ に対して,

$t \neq -1$ のとき, 直線 AP は, 傾きが $\frac{\frac{1}{t} + 1}{t + 1} = \frac{1}{t}$ より,

$$y + 1 = \frac{1}{t}(x + 1) \dots\dots\dots ②$$

また, $t = -1$ のとき, 点 A における接線の傾きは, ①より $y' = -\frac{1}{x^2}$ なので $-\frac{1}{(-1)^2} = -1$ となる。これより,

接線の方程式は, $y + 1 = -(x + 1)$ となり, ②に $t = -1$ をあてはめた式と一致する。

よって, 直線 AP の方程式は t の値にかかわらず②で表せ, 直線 $y = -2$ との交点 Q は, $-2 + 1 = \frac{1}{t}(x + 1)$ から $x = -t - 1$ となり, $Q(-t - 1, -2)$ である。

次に, 直線 BQ の方程式は, $y = \frac{-2}{-t - 1 + 1}(x + 1)$ より, $y = \frac{2}{t}(x + 1) \dots\dots\dots ③$

点 D から直線 BQ に下ろした垂線の方程式は, $y = -\frac{t}{2}(x - 1) \dots\dots\dots ④$

直線③と④の交点 R の軌跡の方程式は, ③④から t を消去すると,

$$y^2 = -(x + 1)(x - 1), \quad x^2 + y^2 = 1$$

なお, 直線③は, 点 B を通る直線のうち $x = -1$ と $y = 0$ は表さない。直線④は, 点 D を通る直線のうち $x = 1$ と $t \neq 0$ から $y = 0$ は表さない。これより, 直線③と④の交点 R が点 $(-1, 0)$, $(1, 0)$ である $t \neq 0$ は存在しないことより, 点 R の軌跡は,

$$\text{円: } x^2 + y^2 = 1 \quad (2 \text{ 点 } (-1, 0), (1, 0) \text{ は除く})$$

(2) ③④を連立すると, $\frac{2}{t}(x + 1) = -\frac{t}{2}(x - 1)$ となり, $4(x + 1) + t^2(x - 1) = 0$ から,

$$(t^2 + 4)x = t^2 - 4, \quad x = \frac{t^2 - 4}{t^2 + 4}$$

$$\text{④から, } y = -\frac{t}{2} \left(\frac{t^2 - 4}{t^2 + 4} - 1 \right) = -\frac{t}{2} \cdot \frac{-8}{t^2 + 4} = \frac{4t}{t^2 + 4}$$

これより $R\left(\frac{t^2 - 4}{t^2 + 4}, \frac{4t}{t^2 + 4}\right)$ となり, 直線 PR が原点を通る条件は $\overline{OP} \parallel \overline{OR}$ から,

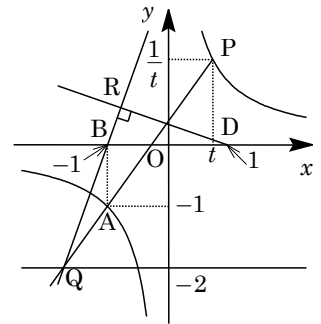
$$t \cdot \frac{4t}{t^2 + 4} - \frac{1}{t} \cdot \frac{t^2 - 4}{t^2 + 4} = 0, \quad 4t^3 - t^2 + 4 = 0 \dots\dots\dots ⑤$$

ここで, $f(t) = 4t^3 - t^2 + 4$ とおくと,

$$f'(t) = 12t^2 - 2t = 2t(6t - 1)$$

これより, $f(t)$ の増減は右表のようになり,

$$f\left(\frac{1}{6}\right) = \frac{1}{54} - \frac{1}{36} + 4 > 0$$



t	...	0	...	$\frac{1}{6}$...
$f'(t)$	+	0	-	0	+
$f(t)$	↗	4	↘		↗

よって、 $f(t)=0$ すなわち⑤の $t \neq 0$ の実数解は1つとなり、直線 PR が原点を通るような実数 t の個数は1である。

[解説]

軌跡に微分の応用を融合した問題です。(1)については、軌跡が線分 BD を直径とする円というのは、 $BR \perp DR$ から明らかです。ただ、(2)の設問を考え合わせて、数式を用いた処理をしています。

3

問題のページへ

(1) $w = \cos \frac{2\pi}{5} + i \sin \frac{2\pi}{5}$ に対して, $w^5 = \cos 2\pi + i \sin 2\pi = 1 \cdots \cdots \textcircled{1}$ となり,

$$w^5 - 1 = 0, (w-1)(w^4 + w^3 + w^2 + w + 1) = 0$$

$w \neq 1$ から, $w^4 + w^3 + w^2 + w + 1 = 0 \cdots \cdots \textcircled{2}$

さて, $P = \left(wz - \frac{1}{wz}\right) \left(w^2z - \frac{1}{w^2z}\right) \left(w^3z - \frac{1}{w^3z}\right) \left(w^4z - \frac{1}{w^4z}\right)$ とおくと, $\textcircled{1}\textcircled{2}$ から,

$$\begin{aligned} P &= \left(wz - \frac{w^4}{z}\right) \left(w^2z - \frac{w^3}{z}\right) \left(w^3z - \frac{w^2}{z}\right) \left(w^4z - \frac{w}{z}\right) \\ &= \left(w^5z^2 - w^2 - w^8 + \frac{w^5}{z^2}\right) \left(w^5z^2 - w^4 - w^6 + \frac{w^5}{z^2}\right) \end{aligned}$$

$$= \left(z^2 + \frac{1}{z^2} - w^2 - w^3\right) \left(z^2 + \frac{1}{z^2} - w^4 - w\right)$$

$$= \left(z^2 + \frac{1}{z^2}\right)^2 - (w^2 + w^3 + w^4 + w) \left(z^2 + \frac{1}{z^2}\right) + (w^2 + w^3)(w^4 + w)$$

$$= z^4 + 2 + \frac{1}{z^4} - (w + w^2 + w^3 + w^4) \left(z^2 + \frac{1}{z^2}\right) + (w^6 + w^3 + w^7 + w^4)$$

$$= z^4 + 2 + \frac{1}{z^4} + \left(z^2 + \frac{1}{z^2}\right) + (w + w^3 + w^2 + w^4) = z^4 + z^2 + 1 + \frac{1}{z^2} + \frac{1}{z^4}$$

すると, $\left(z - \frac{1}{z}\right)P = \left(z - \frac{1}{z}\right) \left(z^4 + z^2 + 1 + \frac{1}{z^2} + \frac{1}{z^4}\right) = z^5 - \frac{1}{z^5}$ となり,

$$\left(z - \frac{1}{z}\right) \left(wz - \frac{1}{wz}\right) \left(w^2z - \frac{1}{w^2z}\right) \left(w^3z - \frac{1}{w^3z}\right) \left(w^4z - \frac{1}{w^4z}\right) = z^5 - \frac{1}{z^5} \cdots \cdots \textcircled{1}$$

(2) $z = \cos \theta + i \sin \theta$ とおくと, $\frac{1}{z} = \cos \theta - i \sin \theta$ から $z - \frac{1}{z} = 2i \sin \theta$

$$z^5 - \frac{1}{z^5} = \cos 5\theta + i \sin 5\theta - (\cos 5\theta - i \sin 5\theta) = 2i \sin 5\theta$$

同様に, $w^k z = \cos\left(\theta + \frac{2k\pi}{5}\right) + i \sin\left(\theta + \frac{2k\pi}{5}\right)$ ($k=1, 2, 3, 4$) から,

$$w^k z - \frac{1}{w^k z} = 2i \sin\left(\theta + \frac{2k\pi}{5}\right)$$

これらの式を $\textcircled{1}$ に代入すると,

$$(2i)^5 \sin \theta \sin\left(\theta + \frac{2\pi}{5}\right) \sin\left(\theta + \frac{4\pi}{5}\right) \sin\left(\theta + \frac{6\pi}{5}\right) \sin\left(\theta + \frac{8\pi}{5}\right) = 2i \sin 5\theta$$

$$\sin \theta \sin\left(\theta + \frac{2\pi}{5}\right) \sin\left(\theta + \frac{4\pi}{5}\right) \sin\left(\theta + \frac{6\pi}{5}\right) \sin\left(\theta + \frac{8\pi}{5}\right) = \frac{1}{16} \sin 5\theta \cdots \cdots \textcircled{2}$$

よって, $C = \frac{1}{16}$ となる。

(3) $\theta = \frac{\pi}{10}$ とすると, $\theta + \frac{2\pi}{5} = \frac{\pi}{2}$, $\theta + \frac{4\pi}{5} = \frac{9\pi}{10}$, $\theta + \frac{6\pi}{5} = \frac{13\pi}{10}$, $\theta + \frac{8\pi}{5} = \frac{17\pi}{10}$

$\textcircled{2}$ より, $\sin \frac{\pi}{10} \sin \frac{\pi}{2} \sin \frac{9\pi}{10} \sin \frac{13\pi}{10} \sin \frac{17\pi}{10} = \frac{1}{16} \sin \frac{\pi}{2}$ となり,

$$\sin \frac{\pi}{10} \sin \frac{9\pi}{10} \sin \frac{13\pi}{10} \sin \frac{17\pi}{10} = \frac{1}{16} \cdots \cdots \textcircled{3}$$

ここで, $\sin \frac{9\pi}{10} = \sin\left(\pi - \frac{\pi}{10}\right) = \sin \frac{\pi}{10}$, $\sin \frac{13\pi}{10} = \sin\left(\pi + \frac{3\pi}{10}\right) = -\sin \frac{3\pi}{10}$,
 $\sin \frac{17\pi}{10} = \sin\left(2\pi - \frac{3\pi}{10}\right) = -\sin \frac{3\pi}{10}$ なので, ③から,

$$\sin^2 \frac{\pi}{10} \sin^2 \frac{3\pi}{10} = \frac{1}{16}$$

すると, $\sin \frac{\pi}{10} \sin \frac{3\pi}{10} > 0$ なので, $\sin \frac{\pi}{10} \sin \frac{3\pi}{10} = \frac{1}{4}$ となる。

[解説]

極形式の複素数の計算と三角関数を融合した問題です。誘導が細かいので方針に迷いはないでしょうが、ただ記述量にはかなりのものです。

4

- (1) 2 曲線 $C_1 : y = e^{ax} \cdots \cdots \textcircled{1}$ と $C_2 : y = a \log x + b \cdots \cdots \textcircled{2}$ は、
 x 座標が t ($0 < t < 1$) の点で接している。①から $y' = ae^{ax}$,

②から $y' = \frac{a}{x}$ なので、

$$e^{at} = a \log t + b \cdots \cdots \textcircled{3}, \quad ae^{at} = \frac{a}{t} \cdots \cdots \textcircled{4}$$

④より、 $a \neq 0$ なので $e^{at} = \frac{1}{t}$ から、 $a = -\frac{\log t}{t} \cdots \cdots \textcircled{5}$

③に代入すると、 $\frac{1}{t} = -\frac{(\log t)^2}{t} + b$ となり、 $b = \frac{(\log t)^2 + 1}{t} \cdots \cdots \textcircled{6}$

- (2) C_1 と x 軸、 y 軸および直線 $x = t$ で囲まれた部分の面積 $S_1(t)$ は、

$$S_1(t) = \int_0^t e^{ax} dx = \left[\frac{1}{a} e^{ax} \right]_0^t = \frac{1}{a} (e^{at} - 1) = -\frac{t}{\log t} \left(\frac{1}{t} - 1 \right) = \frac{t-1}{\log t}$$

ここで、 $f(t) = \log t$ とおくと、 $\lim_{t \rightarrow 1-0} \frac{\log t}{t-1} = \lim_{t \rightarrow 1-0} \frac{f(t) - f(1)}{t-1} = f'(1)$ から、

$$\lim_{t \rightarrow 1-0} S_1(t) = \frac{1}{f'(1)} = 1$$

- (3) まず、 C_2 と x 軸が $x = \alpha$ で交わるとすると、 $a \log \alpha + b = 0$ となり、⑤⑥から、

$$\log \alpha = -\frac{b}{a} = \frac{(\log t)^2 + 1}{\log t}, \quad \alpha = e^{\frac{(\log t)^2 + 1}{\log t}}$$

すると、 C_2 と x 軸および直線 $x = t$ で囲まれた部分の面積 $S_2(t)$ は、

$$\begin{aligned} S_2(t) &= \int_{\alpha}^t (a \log x + b) dx = [a(x \log x - x) + bx]_{\alpha}^t \\ &= at \log t - a \log \alpha + (b-a)(t-\alpha) \\ &= -\frac{\log t}{t} \cdot t \log t + \frac{\log t}{t} \cdot \frac{(\log t)^2 + 1}{\log t} \alpha + \left\{ \frac{(\log t)^2 + 1}{t} + \frac{\log t}{t} \right\} (t-\alpha) \\ &= -(\log t)^2 + \frac{(\log t)^2 + 1}{t} \alpha + (\log t)^2 + \log t + 1 - \frac{(\log t)^2 + \log t + 1}{t} \alpha \\ &= -\frac{\log t}{t} \alpha + \log t + 1 \end{aligned}$$

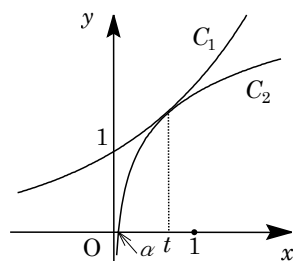
ここで、 $\lim_{t \rightarrow 1-0} \frac{\log t}{t} = 0$ 、 $\lim_{t \rightarrow 1-0} \frac{(\log t)^2 + 1}{\log t} = -\infty$ より $\lim_{t \rightarrow 1-0} \alpha = 0$ となるので、

$$\lim_{t \rightarrow 1-0} S_2(t) = 0 + 0 + 1 = 1$$

[解説]

面積計算と極限の融合問題です。(3)では、計算力が問われています。

問題のページへ



5

問題のページへ

(1) 多項式 $f_n(x)$, $g_n(x)$ に対して, $f_1(x) = x$, $g_1(x) = 1$

$$f_{n+1}(x) = f_n(x) + xg_n(x) \cdots \cdots \textcircled{1}, \quad g_{n+1}(x) = g_n(x) - xf_n(x) \cdots \cdots \textcircled{2}$$

$$\textcircled{1} \text{より, } f_2(x) = f_1(x) + xg_1(x) = x + x \cdot 1 = 2x$$

$$\textcircled{2} \text{より, } g_2(x) = g_1(x) - xf_1(x) = 1 - x \cdot x = 1 - x^2$$

このとき, 等式 $\{f_{n+1}(x)\}' = (n+1)g_n(x)$, $\{g_{n+1}(x)\}' = -(n+1)f_n(x)$ が成り立つことを数学的帰納法で示す。

(i) $n=1$ のとき

$$\{f_2(x)\}' = 2 = (1+1)g_1(x), \quad \{g_2(x)\}' = -2x = -(1+1)f_1(x) \text{ より成立する。}$$

(ii) $n=k$ のとき

$$\{f_{k+1}(x)\}' = (k+1)g_k(x), \quad \{g_{k+1}(x)\}' = -(k+1)f_k(x) \text{ の成立を仮定する。}$$

$$\textcircled{1} \text{から, } f_{k+2}(x) = f_{k+1}(x) + xg_{k+1}(x) \text{ となり,}$$

$$\begin{aligned} \{f_{k+2}(x)\}' &= \{f_{k+1}(x)\}' + g_{k+1}(x) + x\{g_{k+1}(x)\}' \\ &= (k+1)g_k(x) + g_{k+1}(x) - (k+1)xf_k(x) \\ &= (k+1)g_{k+1}(x) + g_{k+1}(x) = (k+2)g_{k+1}(x) \end{aligned}$$

$$\textcircled{2} \text{から, } g_{k+2}(x) = g_{k+1}(x) - xf_{k+1}(x) \text{ となり,}$$

$$\begin{aligned} \{g_{k+2}(x)\}' &= \{g_{k+1}(x)\}' - f_{k+1}(x) - x\{f_{k+1}(x)\}' \\ &= -(k+1)f_k(x) - f_{k+1}(x) - (k+1)xf_k(x) \\ &= -(k+1)f_{k+1}(x) - f_{k+1}(x) = -(k+2)f_{k+1}(x) \end{aligned}$$

これより, $n=k+1$ のときも成立する。

$$\text{(i)(ii)より, } \{f_{n+1}(x)\}' = (n+1)g_n(x) \cdots \cdots \textcircled{3}, \quad \{g_{n+1}(x)\}' = -(n+1)f_n(x) \cdots \cdots \textcircled{4}$$

次に, $f_n(x)$, $g_n(x)$ の次数をそれぞれ p_n , q_n とおくと, $\textcircled{3}\textcircled{4}$ より,

$$p_{n+1} - 1 = q_n \cdots \cdots \textcircled{5}, \quad q_{n+1} - 1 = p_n \cdots \cdots \textcircled{6}$$

$$\textcircled{5} + \textcircled{6} \text{より, } p_{n+1} + q_{n+1} = p_n + q_n + 2 \text{ となり,}$$

$$p_n + q_n = (p_1 + q_1) + 2(n-1) = (1+0) + 2n-2 = 2n-1 \cdots \cdots \textcircled{7}$$

$$\textcircled{5} - \textcircled{6} \text{より, } p_{n+1} - q_{n+1} = -(p_n - q_n) \text{ となり,}$$

$$p_n - q_n = (p_1 - q_1)(-1)^{n-1} = (1-0)(-1)^{n-1} = (-1)^{n-1} \cdots \cdots \textcircled{8}$$

$$\textcircled{7}\textcircled{8} \text{より, } 2p_n = 2n-1 + (-1)^{n-1} \text{ となり, } p_n = \frac{2n-1 + (-1)^{n-1}}{2}$$

よって, n が奇数のとき $p_n = n$, n が偶数のとき $p_n = n-1$ である。

(2) $-\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{\pi}{2}$ において, $\sin n\theta = f_n(\tan \theta)\cos^n \theta$, $\cos n\theta = g_n(\tan \theta)\cos^n \theta$ が成り立つことを数学的帰納法で示す。(i) $n=1$ のとき

$$f_1(\tan \theta)\cos \theta = \tan \theta \cos \theta = \sin \theta, \quad g_1(\tan \theta)\cos \theta = 1 \cdot \cos \theta = \cos \theta \text{ より成立。}$$

(ii) $n = k$ のとき $\sin k\theta = f_k(\tan\theta)\cos^k\theta$, $\cos k\theta = g_k(\tan\theta)\cos^k\theta$ の成立を仮定すると,

$$\begin{aligned} f_{k+1}(\tan\theta)\cos^{k+1}\theta &= \{f_k(\tan\theta) + \tan\theta \cdot g_k(\tan\theta)\}\cos^k\theta\cos\theta \\ &= \sin k\theta\cos\theta + \tan\theta\cos k\theta\cos\theta \end{aligned}$$

$$= \sin k\theta\cos\theta + \cos k\theta\sin\theta = \sin(k+1)\theta$$

$$\begin{aligned} g_{k+1}(\tan\theta)\cos^{k+1}\theta &= \{g_k(\tan\theta) - \tan\theta \cdot f_k(\tan\theta)\}\cos^k\theta\cos\theta \\ &= \cos k\theta\cos\theta - \tan\theta\sin k\theta\cos\theta \end{aligned}$$

$$= \cos k\theta\cos\theta - \sin k\theta\sin\theta = \cos(k+1)\theta$$

これより, $n = k+1$ のときも成立する。(i)(ii)より, $\sin n\theta = f_n(\tan\theta)\cos^n\theta$, $\cos n\theta = g_n(\tan\theta)\cos^n\theta$ (3) 方程式 $f_n(x) = ag_n(x) \cdots \cdots \textcircled{9}$ に対して, $x = \tan\theta$ ($-\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{\pi}{2}$) とおくと,

$$f_n(\tan\theta) = ag_n(\tan\theta), \quad f_n(\tan\theta)\cos^n\theta = ag_n(\tan\theta)\cos^n\theta$$

(2)の結論から, $\sin n\theta = a\cos n\theta$ ($-\frac{\pi}{2} < \theta < \frac{\pi}{2}$)すると, $\sin n\theta - a\cos n\theta = 0$ より, $\sqrt{1+a^2}\sin(n\theta + \alpha) = 0$ となり,

$$\sin(n\theta + \alpha) = 0 \left(\cos\alpha = \frac{1}{\sqrt{1+a^2}}, \sin\alpha = -\frac{a}{\sqrt{1+a^2}} \right) \cdots \cdots \textcircled{10}$$

ここで, $\textcircled{9}$ を満たす x と $\textcircled{10}$ を満たす θ は 1 対 1 の対応をするので, $\textcircled{9}$ の異なる実数解の個数は $\textcircled{10}$ の異なる実数解の個数に一致する。さて, $\textcircled{10}$ の解は $n\theta + \alpha = k\pi$ (k は整数) と表され, $-\frac{n\pi}{2} + \alpha < n\theta + \alpha < \frac{n\pi}{2} + \alpha$ に注意すると, $-\frac{n\pi}{2} + \alpha < k\pi < \frac{n\pi}{2} + \alpha$ から $-\frac{n}{2} + \frac{\alpha}{\pi} < k < \frac{n}{2} + \frac{\alpha}{\pi}$ となり,

$$m < k < M \left(m = -\frac{n}{2} + \frac{\alpha}{\pi}, M = \frac{n}{2} + \frac{\alpha}{\pi} \right) \cdots \cdots \textcircled{11}$$

(i) $a > 0$ のとき $\textcircled{10}$ から $-\frac{\pi}{2} < \alpha < 0$ なので, $-\frac{1}{2} < \frac{\alpha}{\pi} < 0$ となり,

$$-\frac{n+1}{2} < m < -\frac{n}{2}, \quad \frac{n-1}{2} < M < \frac{n}{2}$$

(a) n が奇数のとき $\textcircled{11}$ を満たす k は $-\frac{n-1}{2} \leq k \leq \frac{n-1}{2}$ となり, その個数は,

$$\frac{n-1}{2} - \left(-\frac{n-1}{2}\right) + 1 = n$$

(b) n が偶数のとき $\textcircled{11}$ を満たす k は $-\frac{n}{2} \leq k \leq \frac{n}{2} - 1$ となり, その個数は,

$$\left(\frac{n}{2} - 1\right) - \left(-\frac{n}{2}\right) + 1 = n$$

(ii) $a < 0$ のとき $\textcircled{10}$ から $0 < \alpha < \frac{\pi}{2}$ なので, $0 < \frac{\alpha}{\pi} < \frac{1}{2}$ となり,

$$-\frac{n}{2} < m < -\frac{n-1}{2}, \quad \frac{n}{2} < M < \frac{n+1}{2}$$

(a) n が奇数のとき ⑩を満たす k は $-\frac{n-1}{2} \leq k \leq \frac{n-1}{2}$ となり, その個数は,

$$\frac{n-1}{2} - \left(-\frac{n-1}{2}\right) + 1 = n$$

(b) n が偶数のとき ⑩を満たす k は $-\frac{n}{2} + 1 \leq k \leq \frac{n}{2}$ となり, その個数は,

$$\frac{n}{2} - \left(-\frac{n}{2} + 1\right) + 1 = n$$

(iii) $a = 0$ のとき ⑩から $a = 0$ となり, ⑪から $-\frac{n}{2} < k < \frac{n}{2}$

(a) n が奇数のとき ⑩を満たす k は $-\frac{n-1}{2} \leq k \leq \frac{n-1}{2}$ となり, その個数は,

$$\frac{n-1}{2} - \left(-\frac{n-1}{2}\right) + 1 = n$$

(b) n が偶数のとき ⑩を満たす k は $-\frac{n}{2} + 1 \leq k \leq \frac{n}{2} - 1$ となり, その個数は,

$$\left(\frac{n}{2} - 1\right) - \left(-\frac{n}{2} + 1\right) + 1 = n - 1$$

(i)~(iii)より, 方程式⑨の異なる実数解の個数は,

$a = 0$ かつ n が偶数のときは $n - 1$ 個, このとき以外は n 個

[解説]

関数列についての論証に, その結論を利用した方程式の問題を加えたものです。そのため, 実質 2 題分のボリュームがあります。